

## 口語英語研究 (7)

### 欲求・期待・願望の表現に関して

木戸 充\*・Stuart J. SANDERSON\*\*

\*日本獣医生命科学大学 英語学教室

\*\*Sanderson English School

**要約** 本稿は欲求・期待・願望を表す英語の口語表現についての考察である。本稿の目的は、話し手の欲求を表す “I want ~” / “I would like ~” / “I feel like ~” や話し手の期待や願望を表す “I hope ~” / “I wish ~” に関して、意味の相違、ニュアンスの相違、用いられる状況の相違などを明らかにすることである。なお、木戸・Sanderson (2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014) と同様、本稿は英語を母語とする者と日本語を母語とする者の長時間にわたるディスカッションを基にして書かれている。

キーワード：want, like, wish

日獣生大研報 64, 63-75, 2015.

#### 1. はじめに

本稿の目的は、欲求や期待や願望などを表す口語表現 “I want ~” / “I would like ~” / “I feel like ~” / “I hope ~” / “I wish ~” に関して、それぞれの意味の相違、ニュアンスの相違、用いられる状況の相違などを明らかにすることである。

第2章では一般に同義語とされることの多い “I want ~” と “I would like ~” を比べる。それぞれの特徴に関して「(A)直接的な “I want ~” と間接的な “I would like ~”」、 「(B) 相手への命令になる “I want you to do ~” と “I would like you to do ~”」、 「(C) 強い喜びや優しさなどを表す “I want ~”」に分けて論じ、第2章の論旨を「(D) 結論」でまとめる。

第3章では “I feel like ~” と “I want ~” / “I would like ~” を比べる。“I feel like ~” は「私は～したい」という意味で話し手の欲求を表すことがあるが、話し手の欲求を表す “I want ~” / “I would like ~” にはないニュアンスがある。このニュアンスの違いを「(A) “I feel like ~” の2つの意味」、 「(B) “I feel like ~” と “I want ~” / “I would like ~” の相違」に分けて論じ、第3章の論旨を「(C) 結論」でまとめる。

第4章では “I hope ~” と “I wish ~” を比べる。この2つはどちらも広い意味でI (話し手) の望みを表すと言えるが、両者の表す内容や両者に込められるニュアンスは大きく異なる。この相違を「(A) [現実的な期待]」、 「(B) [非現実的な願望]」 「(C) [一方的な強い願望]」 「(D) [期待を込めた質問]」、 「(E) [過去の事柄についての後悔]」、 「(F)

[相手への要求]」に分けて論じ、第4章の論旨を「(E) 結論」でまとめる。

#### 2. “I want ~” と “I would like ~” の比較

“I want ~” と “I would like ~” はどちらも話し手の欲求を表し、「私は～ほしい」や「私は～がしたい」などと訳される。そのため、この2つは同義語として扱われることも多いが、英語を母語とする者は両者をどのように使い分けているのだろうか。

(A) 直接的な “I want ~” と間接的な “I would like ~”  
want は「欲求」を直接示す語である。したがって、“I want ~” と言えば、I (話し手) の want (欲求) を率直に訴えていることになる。さらに、相手への要求を含めて “I want ~” と言えば、一方的にI (話し手) の want (欲求) を押しつけながら相手に行動を求めているように聞こえることになる。

[ex.1] 父親と息子の会話。

息子：<sup>(1)</sup> “Dad, there’s a new game out, you know.”  
「お父さん、新しいゲームが出たんだ、知っているでしょ」

父親：<sup>(2)</sup> “Oh, yeah?”  
「へえ、そうかい」

息子：<sup>(3)</sup> “Yeah, I want one. All my friends have one.”  
「うん、欲しいんだ。友達はみんな持ってるんだ」

[ex.1] (1) で息子は父親に “Dad, there’s a new game out, you know.” と言って新しいゲームが発売されたことを伝えている。ここでの息子の発話の意図は新たに発売されたゲームを父親に買ってもらうことである。父親は息子の発話の意図を理解しているが, [ex.1] (2) “Oh, yeah?” というあいまいな返事をして, 息子の発話の意図を理解していないふりをしている。父親に自分の気持ちをわかしてもらえていないと思った息子は [ex.3] (3) “Yeah, *I want one*. All my friends have one.” と言っている。このように, 婉曲的な表現を十分に身につけていない子供は, “I want ~” で自分の欲求を直接訴えることがしばしばある。

字句通りに考えれば, [ex.3] (3) の “*I want one*” は「I (私は) one (ゲームが) want (ほしい)」という話し手の欲求を表していることになるが, この欲求が満たされるには「父親がゲームを買う」という相手の行為が必要になる。このように, 相手への要求を含めて “I want ~” が使われると, 話し手の欲求を相手に押し付けるような一方的な言い方をしていることになる。

一方, “I would like ~” には “I want ~” にない間接的で丁寧な響きがある。この婉曲的な響きは仮定法過去 *would* から来るものである。仮定法のニュアンスを含めて “I would like ~” を訳せば, 「I (私は) *would* (もしかしたら) *like* (したいと思っているのですが)」のようになる。

[ex.2] 鉄道の駅の切符売り場での会話。乗客が切符を買おうとしている。

駅員: (1) “May I help you, sir?”

「いらっしゃいませ」

乗客: (2) “Yes. *I’d like* a ticket from London to Liverpool, please.”

「ロンドンからリバプールまでの切符がほしいのですが」

駅員: (3) “Sure.”

「はい, わかりました」

[ex.2] (2) で乗客は “Yes. *I’d like* a ticket from London to Liverpool, please.” と言って, ロンドンからリバプールまでの切符を買いたいと駅員に伝えている。ここでは話し手の欲求が “I would like ~” によって間接的にやわらかく相手に伝えられている。

常識を身につけた大人なら, [ex.2] (2) のような状況で相手から何かを買い求めたい気持ちを伝えるときには, “I want ~” という言い方を避けるのが一般的である。これは *want* が率直に欲求を伝える語であり, 相手への要求を含めて “I want ~” と言った場合には, 幼稚で子供っぽい話し方をしているように, あるいは, 相手を見下すような命令口調で話しているように聞こえるためである。例えば, [ex.2] (2) で乗客が “Yes. *I want* a ticket from London to Liverpool, please.” と駅員に言えば, 客が自分

の立場を利用して駅員に命令しているように聞こえることになる。

用いられる状況にもよるが, 次の [ref.1] の①から⑤のように “I want ~” を使って相手への要求を伝えると, 話し手の欲求を直接強く訴えていることになり, 相手に命令しているように聞こえることもある。

[ref.1] 一方的な命令になる “I want ~”

① *I want* the book back right now.

貸した本を返さない相手に①を言えば, 「すぐにその本を返してほしい」という気持ちを「すぐに本を返せ」という命令に近い言い方で伝えていることになる。

② *I want* the money.

「私はお金がほしい」ということを伝えることばだが, 銀行に押し入った強盗が銀行員に②を言えば「金を出せ」という命令になる。

③ That’s none of your business. *I don’t want* any help.

「君には関係ないことだ。どんな助けもほしくない」と訳せるが, 話し手が相手からの手助けを迷惑に思っている場合には「君には関係ない。余計な口出しをしないでくれ」のように相手に命令していることになる。

④ *I want* to know the reason why you were late.

「君が遅刻した理由を私は知りたい」と訳せるが, 教師が授業に遅れた生徒に④を言えば「遅刻した理由を言いなさい」という命令になる。

⑤ *I don’t want* to hear it any more.

「これ以上それについては聞きたくない」と訳せるが, 言い争いをしているときに⑤を言えば「それはもう言わないでくれ」という命令に聞こえる。

(B) 相手への命令になる “I want you to do ~” と “I would like you to do ~”

*want* の後に *you* という目的語を置いて “I want you to do ~” と言うことがある。これは「I (私は) *you* (あなたに) *want* (してほしい)」と訳されるが, *you* (相手) への要求を明確にしているためきつい響きがある。特に目上の者が目下の者に “I want you to do ~” を使えば, 話し手が自分の権限を利用して相手に命令しているように聞こえることになる。

例えば, レストランで客がウェイトーに “*I want you* to bring me a glass of water.” と言えば, 「水を持ってきなさい」と命令しているように聞こえることになる。これは客が自分の立場を利用して意図的に相手を見下すような言い方をしているように聞こえるためである。

“I want you to do ~” ほど強い響きはないが, “I would like you to do ~” にも命令に近い響きがある。これも特に目上の者が目下の者に対して “I would like you to do ~” を使った場合である。

[ex.3] 上司とその秘書の会話。以前上司は秘書に書類をタイプしておくように言っておいたが、秘書はまだタイプしていなかった。これを知った上司が機嫌を悪くしているところ。

上司：(1) “Miss Smith.”

「スミスさん」

秘書：(2) “Yes, boss.”

「はい」

上司：(3) “Have you typed that paper?”

「あの書類をタイプし終えましたか」

秘書：(4) “No, not yet.”

「いいえ、まだです」

上司：(5) “I’d like you to do it right away. I need it for the meeting this afternoon.”

「今すぐにやってくれたまえ。今日の午後の会議にあれば必要なんだ」

機嫌を損ねた上司は [ex.3] (5) で感情的になって秘書に “I’d like you to do it right away.” と言っている。この “I would like you to do ~” には “Do it right away.” (今すぐにそれをやりなさい) という命令に近い響きがある。このようなきつい言い方に聞こえるのは、you を目的語として “to do it right away” という行動を直接 you (相手) に求めているためである。

#### (C) 強い喜びや優しさなどを表す “I want ~”

“I want ~” は喜び、感謝、助言などを表すときに使われることがある。この場合には “I want ~” に直接的で強い響きがあるため、優しさや思いやりなどの肯定的な気持ちが強調されることになる。

[ex.4] Tom と Lucy は親しい友人同士。Tom が Lucy にプレゼントをあげている。

Tom：(1) “This is a little something for you.”

「これはちょっとしたものなんだけど」

Lucy：(2) “Really?”

「え？」

Tom：(3) “It’s a handmade Swiss watch.”

「スイス製の手作りの時計なんだ」

Lucy：(4) “Oh, thank you so much, Tom. This is just what I’ve always wanted.”

「ああ、どうもありがとう、トム。これはちょうど私がずっとほしかったものだわ」

[ex.4] (4) で Tom から贈り物もらった Lucy は “Oh, thank you so much, Tom.” という感謝のことばとともに “This is just what I’ve always wanted.” と言っている。このような状況で “I want ~” を使えば、プレゼントもらったときの喜びや感謝の気持ちを強調することになる。

[ex.5] 母親と息子の自宅での会話。母親は息子を自宅において買い物に出かけようとしている。

母：(1) “Jimmy, I want you to behave yourself while I’m out. I’ll be back soon.”

「ジミー、母さんがいない間いい子にしていよ。すぐに戻ってくるから」

息子：(2) “OK, mum.”

「わかったよ、ママ」

[ex.5] で母親は買い物に出かけようとしている。その後、子供が一人で留守番することになる。[ex.5] (1) で母親は子供のことを心配しながら “Jimmy, I want you to behave yourself while I’m out.” と言っている。

[ex.5] では目上の母親が目上の息子に対して “I want you to do ~” という言い方をしているが、この場合には命令というよりもむしろ相手を思いやる優しい助言になる。これは母親のことばに息子への愛情や心配が込められているためである。

[ex.4] (4) や [ex.5] (1) で “I want ~” の代わりに “I would like ~” を使うのは不自然である。これは “would like” に婉曲的で間接的な響きがあり、強い喜びや感謝の気持ち、あるいは愛情や思いやりが強調されないためである。

#### (D) 結論

ここまで論じてきた “I want ~” と “I would like ~” の特徴を次の [ref.2] にまとめる。

[ref.2] “I want ~” と “I would like ~” の特徴

- (1) 欲求を直接表す “I want ~” には率直で強い響きがあり、欲求を婉曲的に表す “I would like ~” には間接的で冷静な響きがある。
- (2) 相手への要求を含めて自分の欲求をあらわすとき、一般の大人は [ex.2] (2) のように “I would like ~” を使うことが多いが、婉曲的な表現を身につけていない子供は [ex.1] (3) のように “I want ~” を使うことがしばしばある。したがって、大人が “I want ~” で自分の欲求を一方向的に伝えれば、子供っぽい幼稚な話し方をしていることにもなる。
- (3) 言い方や使われるときの状況次第ではあるが、[ref.1] の①から⑤のように相手への要求を含む “I want ~” が強い命令になることもある。
- (4) you への要求を明確に表す “I want you to do ~” や “I would like you to do ~” には強い響きがある。特に [ex.3] (5) のような状況で目上の者が目下の者に “I want you to do ~” や “I would like you to do ~” を使えば、目上の者が自分の立場を利用して you (相手) に行動を求めることになり、相手を見下す命令のような口調になる。
- (5) [ex.4] (4) や [ex.5] (1) のように、喜び、感謝、愛情、

思いやりなど、肯定的な気持ちを強調するときに “I want you ~” が使われることもある。

夫：(4) “Well…How about Chinese?”  
「そうだね…中華はどう？」

### 3. “I feel like ~” と “I want ~” / “I would like ~” の比較

“I feel like ~” は、“I want ~” / “I would like ~” と同じように、「私は～したい」という話し手の欲求を表すことがある。英語を母語とする者は “I feel like ~” と “I want ~” / “I would like ~” をどのように使い分けているのだろうか。

#### (A) “I feel like ~” の 2 つの意味

“I feel like ~” は [ex.6] (2) のように「I (私は) like (～のように) feel (感じる)」という字句通りの比喩表現として使われることもあるが、[ex.7] (1) のように「私は～したい」という話し手の欲求を含めて使われることもある。

[ex.6] 友人同士である Tom と John の会話。John は運転免許証を取るために試験を受けたが合格しなかった。そのときの悔しい気持ちを John が Tom に説明している。

Tom：(1) “Hey, John. Did you pass the driving test?”  
「ねえ、ジョン。自動車の運転免許の試験には合格したの」

John：(2) “No, I failed again. *I felt like crying* with rage when I got the result.”  
「いや、まただめだったんだ。結果を知ったときには頭にきて泣きたくくなるような気分だったよ」

自動車運転免許証の試験に合格できなかった John は、[ex.6] (2) で “*I felt like crying* with rage when I got the result.” と言っている。ここで John は「I (私は) crying (泣く) like (ような) felt (感じがした)」という言い方で試験に合格しなかったときの口惜しさや怒りを表している。このように “I feel like ~” は「I (私は) like (～のように) feel (感じる)」という字句通りの比喩表現として使われることがある。

[ex.7] 妻と夫の会話。妻が夫に今晚外食をすることを提案している。

妻：(1) “Terry, *I feel like* eating out tonight.”  
「テリー、今晚は外食したいわ」

夫：(2) “OK. What shall we have?”  
「いいよ。何を食べようか」

妻：(3) “I don’t know. Is there anything you’d like to eat?”  
「わからないわ。あなたは何か食べたいものはある？」

[ex.7] (1) で妻は夫に “Terry, *I feel like* eating out tonight.” と言っている。これを字句通りに訳せば、「tonight (今晚) I (私は) eating out (外出する) like (ような) feel (感じがする)」となるが、この発話には「今晚私は外食したい」という話し手の気持ちが含まれている。このように “I feel like ~” は「私は～したい」という話し手の欲求を表すときに使われることもある。

#### (B) “I feel like ~” と “I want ~” / “I would like ~” の相違

“I feel like ~” は本来「I (私は) like (～のような) feel (感じがする)」というあいまいな感覚や気持ちを伝える表現である。そのため、「私は～したい」という話し手の欲求を含むときには、間接的に自分の欲求を伝える響きを持つことになる。このような婉曲的なニュアンスがある点で “I feel like ~” は “I want ~” よりも “I would like ~” に似ていると言える。

ただし、“I feel like ~” と “I would like ~” には feel (感じる) と like (好む) の違いがある。“I feel like ~” は feel (感じる) によって話し手の感覚や気分を表しているため、「(理由はわからないが) なんとなく～したい気分だ」というニュアンスがあり、特に話し手の欲求の理由が明確でないとき (あるいは、話し手が自分の欲求の理由を明確に表したくないとき) に使われる。一方、“I would like ~” は like (好む) によって話し手の好みを表しているため、“I feel like ~” のような自分の欲求の理由をあいまいにするニュアンスはない。

したがって、[ex.7] (1) で妻が “I would like ~” を使って “Terry, *I would like* to eat out tonight.” と言った場合には、それを聞いた夫が妻に外食したい理由について尋ねることもありうる。一方、[ex.7] (1) のように妻が “I feel like ~” を使って “Terry, *I feel like* eating out tonight.” と言った場合には、それを聞いた夫が妻に外食をしたい理由を尋ねることは普通考えられない。これは妻が “I feel like ~” で「テリー、(理由はわからないけど) なんとなく外食したい気分なの」と言っているように聞こえるためである。

[ex.8] 夫と妻の会話。夫が妻に今晚外食をすることを提案している。

夫：(1) “Janet, shall we eat out tonight?”  
「ジャネット、今晚は外食しようか」

妻：(2) “Well, *I’d like* to stay home, Chris. It’s raining outside.”  
「家にいたいわ、クリス。外は雨が降っているわよ」

[ex.8] (1) で夫は妻に外食することを提案している。

それに対して妻は [ex.8] (2) で “Well, *I'd like to stay home, Chris.*” と言ってその提案を断っている。そして、妻はその理由として “It's raining outside.” と言っている。このように話し手が自分の欲求の理由を明らかにしている場合には、“I would like ~” が使われることはあるが、“I feel like ~” が使われることは一般にない。これは “I feel like ~” に「(理由はわからないけれども) なんとなく~したい気分だ」というニュアンスがあるためである。

### (C) 結論

ここまで考察してきた “I feel like ~” の特徴を次の [ref.3] にまとめる。

#### [ref.3] “I feel like ~” の特徴

- (1) “I feel like ~” は本来「I (私は) like (~のように) feel (感じる)」という I (話し手) の feel (感覚) を表す。
- (2) “I feel like ~” は「私は~したい」という話し手の欲求を表すことがある。この意味の “I feel like ~” は直接的で強い響きのある “I want ~” よりも間接的でやわらかな響きのある “I would like ~” に似ている。
- (3) 話し手の欲求を示す場合、“I feel like ~” には「(理由はわからないけれども) なんとなく~したい気分だ」というニュアンスがあるが、“I would like ~” にこのような欲求の理由をあいまいにする響きはない。

## 4. “I hope ~” と “I wish ~” の比較

“I hope ~” と “I wish ~” はそれぞれ「私は~を望む」や「私は~を願う」などと訳されるが、このような訳語からでは両者の違いはわからない。英語を母語とする者は “I hope ~” と “I wish ~” をどのように使い分けているだろうか。

### (A) [現実的な期待]

“I hope ~” は I (話し手) の [現実的な期待] を表す。したがって、“I hope (that) S V ~” では hope 以下の節 (SV) で現実を示す直説法が使われる<sup>1)</sup>。

[ex.9] Kim と Arnold は夫婦, Stacy は彼らの友人。  
Kim と Arnold の家で食事をした Stacy が帰ろうとしているところ。Kim と Arnold が Stacy を見送っている。

Stacy : (1) “Thanks for having me over. It was a great dinner.”  
「招待してくれてありがとう。とても楽しい夕食だったわ」

Kim : (2) “Oh, thank you, Stacy. *I hope we can get*

*together again before long.*”

「あら、ありがとう、ステシー。またすぐに皆で集まりたいわね」

Stacy : (3) “*I really hope so, too.*”

「私も本当にそう思うわ」

Arnold : (4) “Take care, Stacy.”

「気をつけてね、ステシー」

Stacy : (5) “I will. See you both soon.”

「うん。じゃあまたね」

Kim : (6) “See you.”

「またね」

Arnold : (7) “See you.”

「またね」

[ex.9] (2) で Kim は “*I hope we can get together again before long.*” と言っている。そして、[ex.9] (3) で Stacy は “*I really hope so, too.*” と応えている。ここで Kim と Stacy はどちらも近いうちに相手と会うことになると思いながら「近いうちに会いたい」という気持ちを伝え合っている。このように “I hope (that) S V ~” は [現実的な期待] を表すときに使われる<sup>2)</sup>。

[ex.10] 同じ会社に勤める上司と部下の会話。期日である金曜日までに仕事を終わりにできるかどうか上司が部下に尋ねているところ。

上司 : (1) “George, do you think you will be able to get the job done by Friday?”

「ジョージ君、金曜日までに仕事を終わりにすることができると思うかね」

部下 : (2) “*I really hope so, but it doesn't seem to be likely. We are a long way far behind the schedule.*”

「本当にそう願っていますが、可能性は高くありません。予定よりずっと遅れてしまっています」

[ex.10] で上司は部下に期日の金曜日までに仕事を終わることができるかどうか尋ねている。これに対して部下は [ex.10] (2) で “*I really hope so, but it doesn't seem to be likely. We are a long way far behind the schedule.*” と応えている。“it doesn't seem to be likely” と言っていることから、期日までに仕事を終わることができる可能性は少ないと考えていることは明らかだが、ここで部下は hope を使って “*I really hope so*” と言っている。このように、現実となる可能性が少ない場合でも、現実となる可能性があると思われるときには “I hope (that) S V ~” が使われる。

### (B) [非現実的な願望]

第4章の後半で述べるように wish は [一方的で強い願望] を表す語だが、後に節 (SV) が続く “I wish (that) S V ~”

は、[一方的で強い願望]の中でも特に意味を限定して、[非現実的な願望]を表すと言うことができる<sup>3)</sup>。このように意味を限定できるのは、“I wish (that) S V ~”では必ず wish 以下の節 (SV) で現実でない想像を示す仮定法が使われるためである。これとは対照的に、後に節 (SV) が続く “I hope (that) S V ~” は [非現実的な願望]を表す。これは “I hope (that) S V ~” では必ず hope 以下の節 (SV) で現実を示す直説法が使われるためである。

[ex.11] Phil と Abel は親しい友人同士。友人たちとニューヨークを旅行している Phil が自宅にいる Abel に電話しているところ。

Phil : (1) “Hi, Abel. How are you doing?”  
「やあ、エーベル。元気？」

Abel : (2) “Not bad, Phil. How’s your holiday in New York?”  
「まあまあだよ、フィル。ニューヨークでの休暇はどう？」

Phil : (3) “Good. Actually, we are having a great time. We went to the Statue of Liberty yesterday and we are going to see a musical on Broadway tonight. *I wish you were here with us.*”  
「楽しいよ。実際、すごく楽しいね。昨日は自由の女神に行ったし、今晚はブロードウェイでミュージカルを見るんだ。君も僕たちと一緒にいてくれるとよかったのにね」

Abel : (4) “*I wish I were, too.*”  
「僕もそう思うよ」

[ex.11] ではニューヨークにいる Phil が遠く離れたところにいる Abel と電話で話をしている。[ex.11] (3) で Phil は Abel に “*I wish you were here with us.*” と言っている。これに対して [ex.11] (4) で Abel は “*I wish I were, too.*” と応えている。

[ex.11] で Phil と Abel は「Abel がニューヨークにいない」という現実を認識している。そして、互いに「Abel がニューヨークにいればいいのに」という [非現実的な願望] を伝え合っている。wish 以下が [非現実的な願望] になるのは wish 以下で仮定法の were が使われることから明らかである。

[ex.12] Robert と Dick は友人同士。Robert が週末に開かれるパーティーに Dick を誘っているところ。

Robert : (1) “We’re having a party this weekend. Would you like to join us?”  
「この週末にパーティーをやるんだ。君も来ない？」

Dick : (2) “Well, *I wish I could*, but I have to work on my paper.”

「ああ、できればそうしたいけれど、論文をやらなくてはいけないんだ」

Robert からパーティーに来るように誘われた Dick は [ex.12] (2) で “Well, *I wish I could*, but I have to work on my paper.” と言っている。この “I wish I could” は相手からの申し出を断るときに使われる慣用句である。

“I wish I could” の could は現実でない想像を示す仮定法である。したがって、この仮定法 could のニュアンスを込めて “I wish I could” を訳せば、「(実際はできないが) I (私が) could (できたら) wish (いいのに)」のようになる。このように “I wish I could” は「できたらいいのだが」という [非現実的な願望] を表すことで「実際にはできない」という現実を婉曲的に伝える丁寧な表現である。

“I hope (that) S V ~” は [ex.11] (3) や [ex.12] (2) のような状況で [非現実的な願望] を表すことはない。これは hope 以下の従節 (SV) で現実を示す直説法が使われることから明らかである。一方、“I wish (that) S V ~” は [ex.9] (3) や [ex.10] (2) のような状況で [現実的な期待] を表すことはない。これは wish 以下で現実でない想像を示す仮定法が使われることから明らかである。

[ex.13] Jerry と Cathy の映画館での会話。Jerry と Cathy は友人同士。映画の上映中に Jerry と Cathy の背後の席に座っている数人の男女が話をしている。その数人の男女に関して Jerry が不満を言っているところ。

Jerry : (1) “Hey, don’t you think these guys behind us are too noisy?”  
「ねえ、僕たちの後ろにいるあいつら、うるさいと思わない？」

Cathy : (2) “Yeah, I do.”  
「ええ、そうね」

Jerry : (3) “*I wish they would be quiet.*”  
「彼らが静にしてくれるといいんだけどなあ」

[ex.13] (3) では Jerry と Cathy の背後の席にいる they (彼ら) が映画の上映中に話をしている。そのことを不快に思った Jerry が “*I wish they would be quiet.*” と言っている。この発話には they (彼ら) に対する強い不満や批判が込められている。

この would は主語の意志を示す will (～するつもりだ) の仮定法過去である。仮定法過去は現実でない想像 (あるいは、現実になりそうにない想像) を示すため、話し手は「they (彼らは) 静かにするつもりがない」と判断しながら「they (彼らが) be quiet (静かにする) would (つもりが) I wish (あればいいのだが)」という [非現実的な願望] を述べていることになる。このように they は I (話し手) の願望通りにならないという否定的な判断があるため、“*I wish they would V ~*” では they に対する強い不

満や批判が込められることになる<sup>4)</sup>。

“*I wish they would be quiet.*”という発話がなされるのは、例えば、[ex.13]のように映画の上映中に話をしてい  
る they (彼ら) がいる場合である。映画の上映中に話を  
するのは非常識な行為である。そのような一般的な常識か  
ら外れた行為をする they (彼ら) がいれば、周囲の人は  
「they (彼らは) 静かにするつもりがない」と判断するこ  
ともなる。そして、そのような否定的な判断があれば、  
they (彼ら) に対する強い不満や批判を持つことにもなる。

映画館で話をしている人たちを they で示し、hope を使っ  
て “*I hope they are quiet.*” と言うことも考えられる。こ  
の場合には、現実 (あるいは、現実になりそうなこと) を  
示す直接法 are が使われるため、話し手は「they (彼ら)  
が静かになる」と判断しながら「they (彼らは) are quiet (静  
かにして) hope (ほしい)」という [現実的な期待] を述  
べていることになる。この [現実的な期待] では従節の  
they が話し手の期待通りにするという肯定的な判断があ  
るため、they に対する強い不満や批判を込められない。

例えば、“*I hope they are quiet.*”という発話がなされる  
のは、映画の上映が始まる前に話をしている人がいる場合  
である。映画が始まる前の休憩時間に話をするのは誰で  
もする一般的な行為である。したがって、そのような一般  
的な行為をする they に関しては周囲の人が「they (彼ら)  
が静かになるだろう」と判断することにもなりうる。そし  
て、そのような肯定的な判断があるため、they (彼ら) に  
対する強い批判や不満を持たないことにもなりうる。

### (C) [一方的な強い願望]

ここまで見てきたように、“*I wish (that) S V ~*”で  
は従節 (SV) で仮定法が使われるため [非現実的な願望]  
を表すことになるが、“*I wish to do ~*”や“*I wish for 名詞*”  
などのように wish 以下に節 (SV) を置かないこともある。  
このような場合には仮定法を伴わないため、“*I wish ~*”  
が [非現実的な願望] を表すとは必ずしも言えなくなる。

[ex.14] 兄 Billy と弟 Bob の家での会話。Billy と Bob は  
どちらも小学生。この日は Bob の誕生日。Bob  
の年齢と同じ数のローソクがケーキにさしてあ  
る。そのローソクの先には火がともっている。  
そのろうそくの火を吹き消す前に、Billy が Bob  
に何か願い事をするように言っている。

Billy: (1) “Close your eyes and make a wish before  
blowing out the candles, Bob.”

「ろうそくの火を消す前に、目をつぶって何か  
お願いしてみたら、ボブ」

Bob: (2) “All right...” 《目を閉じて祈ってからろうそ  
くの火を吹き消す》

「いいよ・・・」

Billy: (3) “What did you wish for?”

「何をお願いしたの」

Bob: (4) “*I wished for a new bike.*”

「新しい自転車もらえるように祈ったんだ」

[ex.14] (4) で Bob は “*I wished for a new bike.*” と言っ  
ている。この “*I wish ~*” は [非現実的な願望] を表して  
いるとは言えない。つまり、ここで Bob は「新しい自転  
車は手に入らない」と判断しながら「でも新しい自転車が  
手に入ればいいのになあ」という [非現実的な願望] を述  
べているわけではない。このことは “a new bike” (新し  
い自転車) を手に入れることが実現不可能と言えるほど難  
しくないことから明らかである<sup>5)</sup>。

[ex.15] Ben と Beth の会話。Ben と Beth がレストラン  
の前を通りかかったところ。Ben が Beth にその  
レストランを薦めている。

Ben: (1) “Beth, this is a very good restaurant. I  
really recommend it.”

「ベス、ここはいいレストランだよ。お薦めだよ」

Beth: (2) “Oh, really?”

「あら、そうなの」

Ben: (3) “Yeah. The cooks here are really special.  
They can prepare anything you *wish*.”

「うん。ここの料理人は本当に特別なんだよ。  
望みのものは何でも調理してくれるよ」

[ex.15] (3) で Ben は通りかかったレストランを指し  
ながら Beth に “Yeah. The cooks here are really special.  
They can prepare anything you *wish*.” と言っている。発  
話の内容から明らかのように、この wish も [非現実的な  
願望] を表しているとは言えない。

[ex.16] A と B は他人同士。禁煙区域で煙草を吸って  
いる B に A が煙草を吸うのをやめてほしいと言っ  
ているところ。

A: (1) “Excuse me. *I don't wish to to be offensive*  
but this is a non-smoking area, so could you stop  
smoking, please.”

「すみません。無礼なことにならないといいので  
すが、ここは禁煙区域なので煙草を吸うのをやめ  
ていただけませんか」

B: (2) “Oh, sorry. I didn't know that.”

「ああ、すみません。知りませんでした」

[ex.16] (1) で A は B に “Excuse me. *I don't wish to to be offensive but ~*” と言っている。この “*I don't wish to to be offensive but ~*” は相手への要求を伝えるときの前置きとして使われる丁寧な慣用表現である。発話の内容から明らかのように、この wish も [非現実的な願望] を表しているとは言えない。

[ex.17] 夫婦の会話。食事中に煙草を吸おうとしている夫に妻が不満を述べている。

- 妻：(1) “Oh, Steve. How many times have I told you? I don't want you to smoke while we're eating.”  
「ああ、スティーブ。何回言ったらかしら。食事中に煙草を吸わないでよ」
- 夫：(2) “OK. Just as you *wish*.”  
「わかったよ。仰せの通りに」

[ex.17] (2) で食事中に煙草を吸うのをやめるように妻から言われた夫は “OK. Just as you *wish*.” (わかったよ。仰せの通りに) と応えている。この “as you wish” は相手の望むことならどんなことでも言う通りに従うという意味の慣用表現である。発話の内容から明らかなように、この wish も [非現実的な願望] を表しているとは言えない。

上の4つの事例からわかるように、wish 以下に仮定法を伴わない場合には wish が [非現実的な願望] を表すとは必ずしも言えなくなってくる。では、仮定法の有無に関わりなく wish が普遍的に表す意味はどのようなものなのだろうか。

まず、感情的な面や強さの度合いから wish を hope と比べてみよう。第4章(A)で論じたように [現実的な期待] を表す hope には落ち着いた冷静な響きがあり、wish には感情的で強い響きがある。この相違から考えれば、wish は hope がない [一方的な強い願望] を表すとも言える。例えば、[ex.14] (4), [ex.15] (3), [ex.16] (1), [ex.17] (2) で wish の代わりに hope を使えば、冷静で落ち着いた [現実的な期待] を表すことにはなるが、wish のような [一方的な強い願望] を表すことにはならない。

次に、感情的な面や強さの度合いから wish を want と比べてみよう。第2章で論じたように直接欲求を表す want は感情的で強い響きはあるが、wish は want よりもさらに感情的で強い響きがある。例えば、[ex.14] (4) や [ex.15] (3) や [ex.16] (1) では wish の代わりに want を使って “I *want* a new bike” や “They can prepare anything you *want*.” や “I don't *want* to be offensive but ~” と言うことができるが、このように want を使うよりも wish を使う方がより感情的で強い響きがある。これは wish が want がないほどの [一方的な強い願望] を表すためである。

また、[ex.17] (2) の “as you wish” は本来「仰せの通りに」と訳せるほどのかたい表現である。このようなかたい表現を [ex.17] (2) のような夫婦の会話で使えば、どんなことを言われようとも相手に逆らうことはないという気持ちを皮肉とともに大げさに伝えることになる。このような大げさな言い方になるのは、wish が [一方的な強い願望] を表すためである。

さらに、[ex.11] (3) と (4), [ex.12] (2), [ex.13] (3) で見たように wish 以下の節 (SV) で仮定法が使われる “I wish (that) S V ~” は [非現実的な願望] を表す。この

ように現実にはない想像を表す仮定法と共に wish が使われるのは、wish が [非現実的な願望] とも矛盾しないほどの [一方的で強い願望] を表すためである。

以上のことから、仮定法の有無に関わらず wish が普遍的に表す意味は [一方的で強い願望] であると言える。

#### (D) [期待を込めた質問]

“I hope ~” は「~を期待する」だけでなく「~なのか」という質問を含めて使われることがある。このような [期待を込めた質問] を “I wish ~” で表すことはない。

[ex.18] 母親と息子の自宅での会話。母親が自宅の冷蔵庫に入れてあったケーキがなくなっていることに気づいて息子に尋ねているところ。

- 母親：(1) “Hey, Mic. Did you eat that cake in the fridge?”  
「ねえ、ミック。冷蔵庫に入れてあったケーキを食べたの」
- 息子：(2) “Yeah, I did.”  
「うん、食べたよ」
- 母親：(3) “I *hope* you didn't eat it all.”  
「まさか全部食べたわけではないわよね」
- 息子：(4) “Well, it was so great it had gone before I knew it.”  
「あのさ、とってもおいしかったから知らないうちになくなっちゃったんだ」

[ex.18] (3) で息子がケーキを食べたと聞いて母親は息子に “I *hope* you didn't eat it all.” と言っている。この発話には「息子がケーキを全部食べてしまった」という事実を受け入れかねている母親の半信半疑の気持ちを表している。つまり、この発話には「ケーキをすべて食べたということがないといい」という期待と共に「ケーキをすべて食べたのか」という質問が含まれている。

[ex.19] Chris と Richard は親しい友人同士。いっしょにいた Richard が帰ろうとしているところを見つけて、Chris が Richard に声をかけている。

- Chris : (1) “Hey, Richard. Are you leaving?”  
「ねえ、リチャード。帰るの」
- Richard : (2) “Yeah. I have to go.”  
「うん。行かなきゃいけないんだ」
- Chris : (3) “I *hope* I see you at the party tonight.”  
「今晚パーティーで会えるよね」
- Richard : (4) “Yes, I'll be there.”  
「うん、行くよ」
- Chris : (5) “Then, see you later.”  
「じゃあ、また後でね」
- Richard : (5) “See you later.”  
「じゃあね」



[ex.19] (3) で Chris は Richard に “*I hope I see you at the party tonight.*” と言っている。この発話には “*I want to see you at the party tonight.*” (今晚のパーティーで君に会いたい) という期待だけでなく “*Are you coming to the party tonight?*” (君は今夜のパーティーに来るのか) という質問が含まれている<sup>6)</sup>。[ex.19] (3) の “*I hope ~*” に質問の意味が含まれていることは [ex.19] (4) の Richard の応答 “*Yes, I’ll be there.*” から明らかである。

[ex.18] (3) で母親が息子に “*Did you eat it all?*” と尋ねることも可能である。また, [ex.19] (3) で Chris が Richard に “*Are you coming to the party tonight?*” と尋ねることも可能である。ただし, これらの言い方では「ケーキをすべて食べたのか」や「君は今晚のパーティーに来るのか」という質問だけが伝わることになり, 「ケーキをすべて食べてほしくはなかった」や「今晚のパーティーで君に会いたい」という期待は込められない。

[ex.18] (3) や [ex.19] (3) で *hope* の代わりに *wish* を使って “*I wish you hadn’t eaten it all.*” や “*I wish I would see you at the party tonight.*” のように言うことはない。これは, *would* のような仮定法と共に *wish* を使えば, [非現実な願望] を述べていることになり, [期待を込めた質問] にならないためである。

#### (E) [過去の事柄に関する後悔]

“*I wish ~*” は「~してしまったが~しなければよかった」というニュアンスで [過去の事柄に関する後悔] を表すことがある。このような [過去の事柄に関する後悔] を “*I hope ~*” で表すことはない。

[ex.20] Kim と Jennifer は親しい友人同士。Jennifer が見に行くと言っていた映画について Kim が尋ねている。

Kim : (1) “*Jennifer, did you enjoy the film today?*”  
「ジェニファー, 今日の映画は面白かった?」

Jennifer : (2) “*Well, actually, Kim, we missed it. The roads were so busy that when we got to the theater, it had already started, so we didn’t go in. I wish we had left earlier.*”

「ああ, キム, 実はだめだったのよ。道が混んでいて, 映画館に着いたときには, もう映画が始まっていたの。だから, 中に入らなかったわ。もっと早く家を出ればよかったわ」

[ex.20] (2) で道が混んでいたため映画の開始時間までに映画館に行けなかった Jennifer は Kim に “*I wish we had left earlier.*” (もっと早く家を出ればよかったわ) と言っている。この発話には早く家を出なかったことに関する後悔が込められている。

[ex.21] Jim と Tom は友人同士。Tom はサッカーの試合を見に行くつもりだったが, 試合の入場券が売り切れだと聞いてがっかりしている。

Jim : (1) “*Are you going to see the soccer game this weekend?*”

「この週末にサッカーの試合を見に行くの」

Tom : (2) “*No, I can’t. I hear the tickets have already sold out. I wish I had bought one sooner.*”

「いいや, 行けないんだ。入場券がすでに売り切れらしいんだ。もっと前に買ってあげればよかったなあ」

売り切れのため Tom はサッカーの試合の入場券を買うことができなかった。そこで Tom は [ex.21] (2) で Jim に “*I wish I had bought one sooner.*” (もっと前に切符を買ってあげればよかったなあ) と言っている。この発話には以前に切符を買っておかなかったことに関する後悔が込められている。

このように “*I wish (that) I had 過去分詞 ~*” で [過去の事柄についての後悔] を表すことがある。この場合, *wish* 以下の従節 (SV) の S が I (話し手) になる。これは I (話し手) が I (話し手) の行為についての後悔を表すためである。また, *wish* 以下の従節 (SV) では “*had left*” や “*had tried*” などの仮定法過去完了が使われる。これは, 後悔する気持ちを「(実際は~だったが) ~でなかったらなあ」という言い方で過去になかった想像として表す必要があるためである。

一方, [ex.20] (2) や [ex.21] (2) のような状況で “*I hope ~*” を使って [過去の事柄に関する後悔] を表すことはない。これは [現実的な期待] を表す “*I hope ~*” では “*I wish ~*” ほどの感情的で強い響きがなく, 「~してしまったが~しなければよかった」という後悔の気持ちを示すことにならないためである。

#### (F) [相手への要求]

“*I hope ~*” と “*I wish ~*” はどちらも「~してほしい」という [相手への要求] を込めて使われることがあるが, それぞれのニュアンスは大きく異なる。

[ex.22] 母親と息子の自宅での会話。小学生の息子が部屋の中におもちゃを散らかしている。母親はおもちゃを片づけるように何度も息子に言っているが, 息子は片づけようとしないう。そこで母親が子供に注意しているところ。

母親 : (1) “*Hey, Billy. I wish you would clean up this mess.*”

「ねえ, ビリー。この散らかっているものを片づけようという気持ちになってくれるといいんだけど」

息子 : (2) “*Now?*”

「今？」

母親：<sup>(3)</sup> “Yes, right now. Get on with it!”

「そうよ、今すぐよ。さあ、やりなさい！」

[ex.22] で母親はおもちゃを片づけるように何度か息子に言っているが、息子は片づけようとしな。そこで母親は [ex.22] (1) で “*I wish you would clean up this mess.*” と息子に言って、散らかったものを片づけるように息子に求めている。このように “*I wish (that) you would V ~*” は I (話し手) から you (相手) への要求を込めて使われることがある<sup>7)</sup>。

“*I wish (that) you would V ~*” の would は主語の意志を意味する will の仮定法過去である。仮定法過去は現実にはない想像 (あるいは、現実になりそうにない想像) を示すため、“*I wish (that) you would V ~*” では「you (相手に) ~するつもりがない」という判断のもとで「you (相手に) would (~するつもりが) *I wish (あればいいのだが)*」という [非現実的な願望] が述べられていることになる。このように、you (相手) は I (話し手) の願望通りの行動をしないという否定的な判断があるため、you (相手) に対する I (話し手) の強い批判や不満が込められることになる<sup>8)</sup>。

[ex.23] 母親と息子の自宅での会話。これから外出しようとしている母親が、荷物を運んでくれるように息子に頼んでいるところ。

母親：<sup>(1)</sup> “Hey, John. The taxi will be here soon, so *I hope you will help me carry that baggage.*”

「ねえ、ジョン。タクシーがすぐ来るわ。荷物をタクシーまで運ぶのを手伝ってくれるといいんだけど」

息子：<sup>(2)</sup> “Sure, mum.”

「うん、いいよ、母さん」

[ex.23] (1) で母親は息子に “The taxi will be here soon, so *I hope you will help me carry that baggage.*” と行って、タクシーが来たときに荷物を運ぶのを手伝うように息子に求めている。このように “*I hope (that) you V ~*” は I (話し手) から you (相手) への要求を込めて使われることがある。

[ex.23] (1) “*I hope (that) you will V ~*” の will は主語の意志を意味する直説法現在である<sup>9)</sup>。直説法現在は現実 (あるいは現実になりそうなこと) を示すため、“*I hope (that) you will V ~*” は「you (相手に) ~するつもりがある」と判断しながら「you (相手に) will (~するつもりが) *I hope (あってほしい)*」という [現実的な期待] を表していることになる。you (相手) が I (話し手) の期待通りにするつもりがあるという判断があるため、you (相手) への要求を含む “*I hope (that) you will V ~*” は you (相手) への強い批判や不満は込められない<sup>10)</sup>。

[ex.23] (1) のような状況で “*I wish (that) you would V ~*” を使って母親が子供に “*I wish you would help me carry the baggage.*” とすることも考えられる。この場合には非現実を示す仮定法 would が使われるため、「(荷物を運ぶのを手伝うつもりがないが) you (相手に) 荷物を運ぶのを手伝うつもりがあってくればいいのだが」という you (相手) への強い不満や批判が込められる。このように母親が子供に言うのは、例えば、母親が何度も息子に運ぶように頼んでも息子が荷物を運ぼうとしないような場合である。

また、[ex.22] (1) のような状況で母親が子供に “*I hope you will clean up this mess.*” とすることも考えられる。この場合には現実を示す直説法 will が使われるため、「you (相手は) this mess (この散らかっているものを) clean up (きれいにする) will (つもりがある)」と判断しながら現実的な期待を込めて相手に要求していることになり、you (相手) への強い不満や批判は込められない<sup>11)</sup>。

### (G) 結論

ここまで (A) [現実的な期待], (B) [非現実的な願望], (C) [一方的な強い願望], (D) [期待を込めた質問], (E) [過去の事柄についての後悔], (F) [相手への要求] に分けて “*I hope ~*” と “*I wish ~*” を比べてきた。これら 6 つの意味に関して “*I hope ~*” と “*I wish ~*” の使用の可否を以下の [ref.4] にまとめる。[ref.4] において○は (A) から (F) のそれぞれの意味を含めて使われること、- は (A) (B) (C) (D) のそれぞれの意味を含めて使われないことを示している。

[ref.4] “ <i>I hope ~</i> ” と “ <i>I wish ~</i> ” の比較		
	“ <i>I hope ~</i> ”	“ <i>I wish ~</i> ”
(A) [現実的な期待]	○	—
(B) [非現実的な願望]	—	○
(C) [一方的な強い願望]	—	○
(D) [期待を込めた質問]	○	—
(E) [過去の事柄に関する後悔]	—	○
(F) [相手への要求]	○	○

ここまで論じてきた “*I hope ~*” と “*I wish ~*” の特徴の要点を次の [ref.5] にまとめる。

[ref.5] “*I hope ~*” と “*I wish ~*” の特徴

(A) [現実的な期待]

“*I hope (that) S V ~*” は hope 以下の従節 (SV) で現実を示す直説法が使われる。したがって、“*I hope (that) S V ~*” は [現実的な期待] を表し、[非現実的な願望] を表すことはない。

(B) [非現実的な願望]

“*I wish (that) S V ~*” では wish 以下の従節 (SV)

で非現実を示す仮定法が使われる。したがって、“I wish (that) S V ~” は [非現実的な願望] を表し、[現実的な期待] を表すことはない。

(C) [一方的な強い願望]

広い意味で“I wish ~”はI(話し手)の[一方的な強い願望]を表す。この[一方的な強い願望]には“I wish (that) S V ~”で表される[非現実的な願望]も含まれる。冷静で落ち着いた響きのある“I hope ~”には[一方的な強い願望]と言えるほどの強く感情的な響きはない。

(D) [期待を込めた質問]

“I hope ~”は[期待を込めた質問]を表す一方、“I wish ~”は[期待を込めた質問]を表すことはない。これは一方的で強い願望を表す“I wish ~”には、質問を含意する余地や相手からの応答を求める余地がないためである。

(E) [過去の事柄に関する後悔]

仮定法過去完了を伴う“I wish I had 過去分詞 ~”は「(実際は~ではなかったが)~しておけばよかった」というニュアンスで[過去の事柄に関する後悔]を表すことがある。仮定法を伴わない“I hope (that) S V ~”は[過去の事柄に関する後悔]を表すことはない。

(F) [相手への要求]

“I hope ~”と“I wish ~”はどちらも[相手への要求]を表すことがある。ただし、直説法を伴う“I hope (that) you will V ~”では、行うwill(意志)がyou(相手)にあることが前提となるため、youへの強い不満や批判は込められない。一方、仮定法を伴う“I wish (that) you would V ~”では、行うwill(意志)がyou(相手)にないことが前提となるため、youへの強い不満や批判が込められる。

ではhope以下が未来の事柄になることが自明であるためである。したがって、hope以下のVにwillを添えた場合には、未来の事柄であることをwillで改めて示すことになり、礼儀正しくかたい話し方をしていることになる。例えば、[ex.9](2)でKimが“I hope we will get together again before long.”と言え、親しい友人同士で「近いうちにまたお会いしたい」のようなあらたまった話し方をしていることになる。

- 3) 望まれることが「非現実的」であるかどうかは話し手の主観に委ねられる。したがって、本稿における[非現実的な願望]とは「現実になる可能性がないと『話し手が判断している』願望」を意味する。
- 4) この他、喫煙をやめようとしないう my husband に関して “I wish my husband would quit smoking.” (夫が喫煙をやめてくれるといいんだけど) と言うことも考えられる。また、なかなか要点を言わない he に関して “I wish he would get to the point.” (彼が要点を言ってくれるといいのだけれど) と言うことも考えられる。どちらも “I wish (that) S would V ~” であり、S である my husband や he に対する強い不満や批判が込められる。
- 5) wish 以下が必ずしも [非現実的な願望] とならないことはしばしばある。例えば、クリスマスが近づいてきたときクリスマスカードなどに “I wish you a Merry Christmas.” (よいクリスマスをお迎えください) と書いて人に送ることがある。また、何かに挑もうとしている相手に “I wish you good luck.” (幸運を祈っています) と言うことがある。いずれも「you(相手)が a Merry Christmas (よいクリスマス) を迎えることはない」や「you(相手)が good luck (幸運) を得ない」という判断のもとに [非現実的な願望] を伝えているわけではない。これは表されている内容や使われる状況から明らかである。
- 6) [ex.9](2) “Oh, thank you, Stacy. I hope we can get together again before long.” の can get ように、[現実的な期待] を表す “I hope ~” では hope 以下が必ず未来の事柄になる。しかし、[ex.19](3) “I hope I see you at the party tonight.” の see ように、[期待を込めた質問] を表す “I hope ~” では hope 以下が未来の事柄だけでなく過去や発話時の事柄になることもある。例えば、[ex.18](3) “I hope you didn't eat it all.” の didn't eat は過去の事柄である。また、May I interrupt you? (お邪魔してよろしいでしょうか) という質問を含めて “I hope I'm not interrupting you.” (お邪魔になっていないといいのですが) と言うことがあるが、この am not interrupting は発話時の事柄である。
- 7) 「(実際には~するつもりはないが) ~するつもりがあってくればいいのに」という批判や不満を含む点で、[ex.22](1) “I wish you would clean up

## 注 釈

- 1) 期待されるものが「現実的」であるかどうかは話し手の主観に委ねられる。したがって、本稿における[現実的な期待]とは「現実になる可能性がある」と『話し手が判断している』期待」を意味する。
- 2) [ex.9](2) “I hope we can get together again before long.” のように hope 以下の V に can を添えた場合には、「何とかして can see (会える) ようになりたい」という強い感情が込められる。一方、“I hope we get together again before long.” のように hope 以下の V に can を添えない場合には、より冷静に「会いたい」という気持ちを伝えていることになる。また、[現実的な期待]を示す “I hope (that) S V ~” では hope 以下が未来の事柄になるが、一般の会話では hope 以下の V に will を添えないことが多い。これは [現実的な期待] を表す “I hope ~”

this mess.”は [ex.13] (3) “*I wish they would be quiet.*” に似ている。両者の相違は批判や不満の対象にある。[ex.22] (1) “*I wish you would clean up this mess.*” では wish 以下の節 (SV) の S が you (相手) であるため (つまり, you (相手) への批判や不満が直接 you (相手) に伝わるため), you (相手) への要求になる。一方, [ex.13] (3) の “*I wish they would be quiet.*” では wish 以下の節 (SV) の S が they (彼ら) であるため (つまり, they (彼ら) への批判や不満が直接 they (彼ら) に伝わらないため), they (彼ら) への要求にならない。

- 8) この他, 帰宅が遅い相手に “*I wish you would come early for once.*” (たまには早く帰宅する気持ちを持ってほしいものだ) と言うことがある。また, 何かを口に入れたまま話をする相手に “*I wish you wouldn't speak with your mouth full.*” (口をいっぱいにして話すのをやめてほしいものだ) と言うことがある。いずれの “*I wish you would V~*” も「you (あなた) に~してほしい」という you (相手) への要求と you (相手) への強い不満や批判が込められる。
- 9) “*I hope (that) S V~*” で相手への要求を表す場合には [ex.24] (1) のように hope 以下の従節で will が使われることが多い。このように will を使う場合には, 「you (相手) に will (意志) があってほしい」という you (相手) の will (意志) を期待するニュアンスになる。また, [ex.23] (1) では can を使って “*I hope you can help me carry the baggage.*” と言うこともある。この場合には「you (あなたが) can (できる状況であってほしい)」のように will を使う場合よりも控えめに相手に要求しているニュアンスになる。
- 10) “*I hope (that) you will V~*” は「I (私は) you (あなたに) will (~する意志があること) hope (望む)」というニュアンスで you (相手) の未来の行動に関する I (話し手) の思いを落ち着いて冷静に伝える表現である。したがって, “*I hope (that) you will V~*” が [相手への要求] を表す場合でも, [ex.23] (1) “*The taxi will be here soon, so I hope you will help me carry that baggage.*” のように hope 以下は発話時から時間的にある程度離れた未来の事柄になる。したがって, 相手への要求を含む発話と同時に相手の行動を求めるような場合には “*I hope you will V~*” を使うことはない。例えば, 窓の近くにいる相手に窓を閉めてもらうように頼むとき, “*Could you shut the window, please?*” (窓を閉めてくれませんか) と言うことがあるが, これと同じ意味で “*I hope you will shut the window.*” と言うことはない。
- 11) [ex.22] (1) のような状況で “*I hope you will clean up this mess.*” と言った場合には, 母親が息子に散らかったものを片づけるように強く求めていること

になる。この場合強い言い方になるのは, 散らかったものを片づけるということが誰もが習慣的に行うべき事柄であり, そのような習慣的に行うべき事柄が行われていないためである。そして, そのような状況で当然求められることが落ち着いた響きのある “*I hope~*” で表されると, 必要以上に丁寧な言い方になって皮肉な響きが生まれるためである。一方, [ex.23] (1) のように “*The taxi will be here soon, so I hope you will help me carry that baggage.*” と言った場合には, 母親が息子にタクシーまで荷物を運んでくれるようにやわらかく求めていることになる。この場合やわらかな言い方になるのは, タクシーまで荷物を運ぶということが個人的で特定の事柄であり, そのような個人的で特定の事柄に対する要求が丁寧で落ち着いた響きのある “*I hope~*” で表されるためである。

### 参 考 文 献

- ・ 荒木一雄・安井稔 監修『現代英文法辞典』(1992). 三省堂
- ・ 石橋幸太郎・広瀬泰三・伊藤健三・高梨健吉・鳥居次好・渡辺藤一 監修『英語語法大辞典』(1990). 大修館
- ・ 安藤貞夫・福村虎治郎・川上道生・小西友七・三浦新市・空西哲郎・渡辺登士 監修『続・英語語法大辞典』(1986). 大修館
- ・ 安藤貞夫・福村虎治郎・川上道生・小西友七・三浦新市・空西哲郎・渡辺登士 監修『英語語法大辞典第3集』(1989). 大修館
- ・ 大塚高信 監修『新英文法辞典』(1970). 三省堂
- ・ 大塚高信・岩崎民平・中島文雄 監修『英文法シリーズ』(1976). 研究社
- ・ 小西友七 監修『英語基本動詞辞典』(1980). 研究社出版
- ・ 木戸充・Sanderson, S. J. (2009). 「口語英語研究 (1): 人名及び人名相当語句に関して」『日本獣医生命科学大学研究報告』58, pp. 142-154
- ・ 木戸充・Sanderson, S. J. (2010). 「口語英語研究 (2): 人と会ったときの挨拶表現に関して」『日本獣医生命科学大学研究報告』59, pp. 113-124
- ・ 木戸充・Sanderson, S. J. (2011). 「口語英語研究 (3): 人名及び人名相当語句に関して」『日本獣医生命科学大学研究報告』60, pp. 105-114
- ・ 木戸充・Sanderson, S. J. (2012). 「口語英語研究 (4): Christmas や New Year に関わる表現及び Nice to meet you や Nice meeting you などの挨拶表現に関して」『日本獣医生命科学大学研究報告』61, pp. 71-86
- ・ 木戸充・Sanderson, S. J. (2013). 「口語英語研究 (5): 人と別れるときの挨拶表現句に関して」『日本獣医生命科学大学研究報告』62, pp. 106-119
- ・ 木戸充・Sanderson, S. J. (2014). 「口語英語研究 (6): 謝罪の表現に関して」『日本獣医生命科学大学研究報告』62, pp. 89-97

- 
- ・ *Collins Cobuild English Language Dictionary*(1987), Pearson Education Limited  
Collins Sons & Co Ltd
  - ・ *Longman Dictionary of American English* (1983),
  - ・ Hornby, A. S. *Oxford Advanced Learner's Dictionary*  
(2000), Oxford University Press

---

## Study of Colloquial English (7) : Concerning Expressions Showing Desire and Expectation

Mitsuru KIDO\* and Stuart J. SANDERSON\*\*

\*Laboratory of the English Language, Nippon Veterinary and Life Science University

\*\*Sanderson English School

### Abstract

This article is a study on colloquial English expressions which show the speaker's desire or expectation such as "I want ~" / "I would like ~" / "I feel like ~" / "I hope ~" / "I wish ~." As in Studies of Colloquial English (1) (2) (3) (4) (5) and (6), this study, based on discussions between native speakers of English and Japanese, analyzes in what situations those colloquial expressions above are used and what differences there are between them<sup>1)</sup>.

**Key words** : want, like, wish

Bull. Nippon Vet. Life Sci. Univ., **64**, 63-75, 2015.